オリエンテーション――ヘレニズムとヘブライズム
１．存在論と聖書
２．創造――フィロン、アウグスティヌス
３．契約――社会契約説
４．知恵――カント
５．堕罪・悪――リクール
６．歴史――ヘーゲル　5/21
７．神の国と終末――アウグスティヌス、ヨアキム　5/28
８．愛――パスカル　6/4
９．自己――キルケゴール　6/11
１０．死――ハイデッガー　6/25
１１．永遠――波多野精一　7/2
１２～１４．受講者の研究発表　7/9（田中吉隆、ブラジミロブ　イボウ）
7/16（張旋、張 舒青）, 23（齋藤伎璃子、立川瑛世）

＜前回＞知恵
（１）聖書の知恵思想
１．捕囚期以降の創造論の展開、ヘレニズムの文脈
知者の役割。古代ペルシアのインパクトにおける思想転換（基軸時代）
cf.　古代ギリシャの知者（哲学者、波多野精一『西洋宗教思想史（希臘の巻）』）
３．知恵文学の成立の場：フォン・ラートらの旧約聖書研究
→　宮廷知識人、とくにエジプトの書記学校に相当する官吏養成　学校の知識人
４．共同体の知恵：共同体の一員として習得すべき知恵（＝慣習的知恵）
因果応報原理の中心的な役割。
箴言１章８節「わが子よ、父の諭しに聞き従え。母の教えをおろそかにするな。」
６．ヘブライ的知恵文学の思想的特徴
①創造の知恵、あるいは知恵による創造
②神の創造行為の探求と称賛としての科学　→　自然を通した神の讃美
→　自然神学（書物としての自然）
③「知恵のある生活」：
④因果応報とその限界：
「コヘレトの言葉」(「なんという空ししさ、なんとういう空しさ、すべては空しい」)
「ヨブ記」は、正しく生きる人間（義人）が不幸になる、という問題（義人の苦難）
７．知恵の教師イエス：伝統的な知恵に対する転換的な知恵
（２）ストアの自然法とキリスト教
９.「キリスト教の創造信仰は、一方では明瞭に、ユダヤ教正典たる旧約聖書の創造信仰の継承である。他方では、しかし、ストア派の汎神論的な創造信仰が、天文学の教科書を通じてギリシャ語のユダヤ教に継承され、それが更に最初期のギリシャ語ユダヤ人キリスト教に継承されたのである。」（田川、48）
10.「自然法、より、正確には、すべての法的社会的な規則や制度がそこから生ずるひとつの倫理的な自然法則という概念は、ストア派の所産である」（トレルチ、250）。
・絶対的な自然法則と相対的な自然法則
11.「近代の世俗的自然法も自由主義的理想主義も、古代のストア的=キリスト教的理念と同じような闘争と困難の中で、必要な改変を施して、存在している。」（272）
（３）近世哲学の問題状況とカント
12. カントにおける理論と実践の二元性（？）

「第一は、理性による理論的認識であり、また第二は、理性による実践的認識である」
13. この二元性とその克服の思想的営み（ドイツ観念論）
何が問題なのか。
外的自然と自然法則：ニュートン力学、決定論
内的自然と道徳法則：自由
↓
決定論と自由との二元的対立という枠組み（近世哲学のパラダイム）が、このアポリアを生み出したのではないのか。これは擬似的問題ではないのか。
小坂井敏晶『責任という虚構』東京大学出版会、2008年。
14. キリスト教的知恵思想あるいはストアの自然法が再考する意義。
トランス：カント的二元論を乗り越える「統一論的な視野における実在論的神学」（神学的科学あるいは科学としての神学）の試み。アインシュタインとバルト。
15. カント主義の諸系譜から、この問題の議論の線を取り出すこと。
トレルチ、カッシーラー、波多野

５．　堕罪・悪――リクール

（1）悪と告白

１．創造・契約・知恵　→　広義の合理性（自然法則／道徳法則）
直観、現象学→本質
２．現実：合理性と非合理性の曖昧な結合・混合（ティリッヒ：Zweideutigkeit, ambiguity）
↓
非合理的なものをいかに言語化・語るのか
悪・不幸・罪、神秘・超越・聖なるもの
３．図式化：オットー『聖なるもの』
４．告白あるいは神話：リクール

＜詩編 51 編＞
1 【指揮者によって。賛歌。ダビデの詩。
2 ダビデがバト・シェバと通じたので預言者ナタンがダビデのもとに来たとき。】
3 神よ、わたしを憐れんでください／御慈しみをもって。深い御憐れみをもって／背きの罪をぬぐってください。4 わたしの咎をことごとく洗い／罪から清めてください。5 あなたに背いたことをわたしは知っています。わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。6 あなたに、あなたのみにわたしは罪を犯し／御目に悪事と見られることをしました。あなたの言われることは正しく／あなたの裁きに誤りはありません。7 わたしは咎のうちに産み落とされ／母がわたしを身ごもったときも／わたしは罪のうちにあったのです。

＜ローマの信徒への手紙＞
7:14　わたしたちは、律法が霊的なものであると知っています。しかし、わたしは肉の人であり、罪に売り渡されています。15　わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。16　もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。17　そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。18　わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。19 わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。…… 24　わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょう

か。25　わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えていますが、肉では罪の法則に仕えているのです。

（２）悪と神話、解釈学

５．神話→解釈学

＜エデン神話：創世記２～３章＞

「2:16 園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」

「3:1 主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」2 女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。3 でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」4 蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。5 それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」6 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。」

６．エデン神話に基づいて考えるとき、罪はどこからやってきたことになるのか？

・神話という語り方の意義（言語的文学的機能）

　　解釈の多様性を残しつつ、解釈を促す（リクールの悪のシンボリズムの研究）

・ヘビ：善悪二元論

　女：身体・欲望＝悪

　男：自由意志論

　神：神義論

　　↓

キリスト教的悪論の可能性

　自由意志：

　　哲学的意志論のキリスト教的源泉（アーレント『精神の生活　上下』岩波書店）

　　有限的自由（可能性）とその現実化（ティリッヒ）

　　過ちやすさ・脆弱性（リクール）

　　『不安の概念』と『死に至る病』

７．罪と悪

　人間の行為と自然的過程との区別あるいは連関

（３）神義論

８．悪論：どんな悪を念頭に置くのか。

９．ライプニッツ『弁神論』　　cf.　シェリング

・悪の実在の現実、最善なる神が創造した最善の世界。

　悪はその世界の内部でより大きな善のためにのみ許容され存在する

　　悪の現実の消極的理由、予定調和

・自然的な悪（苦痛）、道徳的な悪（罪）、形而上学的な悪（不完全性）

　　欠如としての悪

　　完全化の過程における悪

10．神義論（弁神論）

・何が求められているのか

理論的な理由づけ・説明が問題なのか、あるいは過去への回帰・復元か
慰め・癒やしとは？
関係の回復、見出された意味
・全能性を弱めることは可能か：弱き神
ホワイトヘッド、ヴェイユ、ヨナス
シェーラー、ハイデッガー、ヴァッティモ　　cf. ティリッヒ

11．ヨーナス『アウシュヴィッツ以後の神』（モルトマン、北森嘉蔵）
「無関心な死んだ永遠ではなく、時とともに積み重なる実りによって成長していく永遠」
「苦しみ、生成する神」「気づかう神」（18）、「この身にリスクを抱えた神」（19）
「この神は全能の神ではありません」、「全能の力とは自己矛盾、自己否定、無意味な概念」（20）
「〈力〉とは関係概念であって、複数の極からなる関係を必要とします。だとすれば、相手のなかの抵抗と出会わない力は、およそ力がないの同然です。力は力をもつ相手と関わることで発揮されます」（21）
「神の全能は絶対で無限であるという考えについては、このように論理的存在論的な異論があります」、「神の全能と神の善性とを両立させるとすれば、それとひきかえに、神をまったき測りがたきものに、つまりは謎にせざるをえません」（22）
「完全な善と全能とを神に帰するとすれば、神はまさに完全に隠れた、理解できないものであらざるをえないでしょう」（23）
「神は理解可能で善であり、それにもかかわらず、世界には災いが存在する、と」、「私たちは全能の概念を疑わしいと認めたのですから、消し去らなくてはならないのはこの属性です」（24）
↓
「神の力を限定されたものとみなすべきだ」「神の側からの譲歩」（24）
「神は沈黙しました」、「神はそれを欲したからではなくて、そうできなかったから、介入しなかったのだ、と」（25）
「神が力を断念したのは、ひとえに人間の自由をゆるすためです」（26）
「ルリアのカバラのなかの宇宙論の中心概念であるツィムツム（Zimzum）の考え」「種収縮、退却、自己制限」（27）
「神にはもはや与えるべきものはありません。いまや、人間のほうが神に与えなくてはなりません」（28）
「神的な冒険の運命は私たちの移り気な手のうちに、つまりどう形容するにしても万有のなかのこの地上の片隅にゆだねられており、それに応える責任が私たちの肩にかかっている」、「創造の意図を無にしてしまうこともまた、私たちの手中にあることは疑いえない」（105）、「宇宙規模でなされたの実験」（106）
「エティ・ヒレスムが遺した日記」「一九四三年に彼女はアウシュヴィッツでガスによって殺された」、「「神が私をこれ以上助けないなら、私が神を助けなければならない。・・・・私はできるかぎり助けるようにいつも努めよう」」（107）

＜参考文献＞

１．高坂史朗編『悪の問題――現代を思索するために』昭和堂。
２．酒井潔／佐々木能章編『ライプニッツを学ぶ人のために』世界思想社。
３．Ａ・プランティンガ『神と自由と悪と――宗教の合理的受容可能性』勁草書房。
４．シェリング『人間的自由の本質』岩波文庫。
５．リクール『悪のシンボリズム』渓声社、『人間、この過ちやすきもの』以文社。
６．ハンス・ヨーナス『アウシュヴィッツ以後の神』法政大学出版局。